

【PWS 出張報告書】 幸島・フェニックス自然動物園・都井岬を訪れて

京都大学霊長類研究所 人類進化モデル研究センター
技術職員 橋本直子

1. 日程：2014年2月16日から2月18日
2. 訪問先ならびに対応者
：幸島（京都大学野生動物研究センター幸島観察所）／鈴木崇文氏
：宮崎市フェニックス自然動物園／郡健一郎氏
：都井岬・都井岬ビジターセンター／柳谷聖一氏
3. 同行者：山中淳史氏（京都大学霊長類研究所 技術職員）

4. 目的

報告者は、研究所においてニホンザルをはじめとする多くの霊長類種の飼育管理に日々携わっている。野生ニホンザルが生息する環境に足を運び生態や行動様式などを五感を通して体感し理解を深めることは、実験動物福祉の観点から飼育下での環境エンリッチメントの模索や飼育形態の検討を図るために貴重な情報源となると考え、野生ザルの観察を企てた。今回の訪問先には、霊長類研究の発祥の地として日本が誇るフィールドである幸島を選んだ。また、宮崎市内に位置するフェニックス自然動物園では、16頭のチンパンジーを数群に分けて飼育していることから、群れの個体管理などについても情報交換できることが期待された。さらに、串間市にある都井岬は、野生のウマが生息する世界的にも珍しいフィールドであることから、生息環境や個体管理などについて情報収集することを目的とした。

5. 内容

a.) 幸島および幸島観察所 (写真1)



(写真1)

2日間の予定だったが、あいにくの悪天候により1日しか幸島へ渡ることができず残念だった。鈴木氏に同行させていただき、オオドマリでの個体の出欠確認や社会関係の観察をおこなった (写真2)。



(写真2)

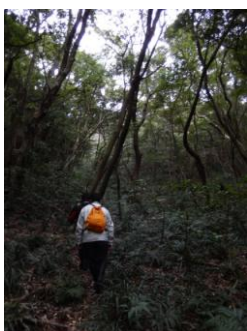
当日は数名の研究者らがいたが、幸島のサルたちは初めて見る人がいることなどおかしな様子で随分人に馴れている印象

があった (写真3)。

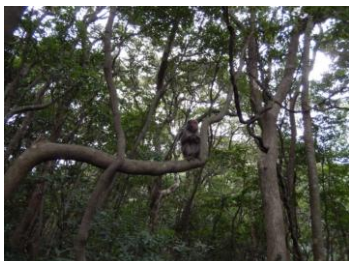


(写真3)

餌付けは最小限のムギだけにも関わらずこれだけサルたちが一目散に浜辺まで駆け下りてくる様子からは、野生での採食環境の厳しさがうかがえた。また、島の最高点へ向かって森の中を歩いた際、植生調査の方形区やシードトラップの実験装置などが設置されており、幸島での研究テーマの豊富さが垣間見え、研究フィールドとしての重要性も再認識できた (写真4・5)。



(写真4)



(写真5)

下山途中には沢の近くで野鳥が何かに襲われた痕跡があり、サルによるものかどうかは不明とのことであったが、珍しい事例が観察できた (写真6)。サルの体サイズは霊長研での飼育個体に比べ2割ほど小さい印

象だったが毛並みは良好で (写真7)、便も緑がかった良便を確認できた (写真8)。



(写真6)

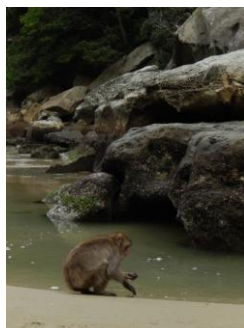


(写真7)



(写真8)

飼育環境にももっと樹木や植物由来の餌を導入できるよう検討したいと感じた。最後には、オオドマリの浜辺でムギ洗いをする個体の観察もできた (写真9)。野生では採食効率を高めるために認知能力を駆使して過ごしていることがうかがえる一面だった。



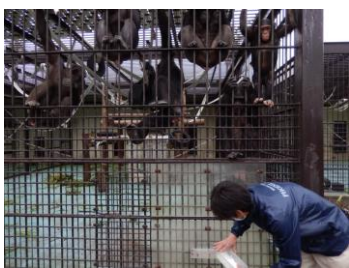
(写真9)

翌日は幸島観察所に伺い、鈴木氏の日常の個体管理や施設管理業務についてお聞き

した。長年にわたる観察で得られた膨大なデータを管理するためにデータベースを構築されたことは印象的だった。われわれが日々おこなっている飼育管理業務においても、情報管理は重要な一面である。今後もデータ管理の手法等について情報交換できることを期待する。研究員の高橋明子氏にも野生動物と生息環境との関連など貴重な研究の話題を提供していただいた。

b.) 宮崎市フェニックス自然動物園

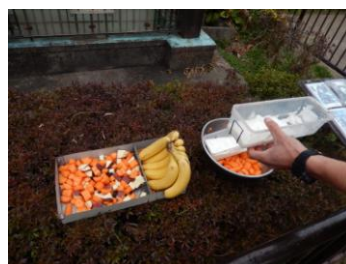
フェニックス自然動物園では、おもにチンパンジーやサル類を担当している郡氏に園内を案内していただき、特にチンパンジーの群管理や飼育技術の一つである環境エンリッチメントの取り組みについて意見交換をおこなった。チンパンジーの飼育舎は、築40年ほどと古く決して広いとは言い難い施設だったが、消防ホースや丸太を組んだ台などをうまく配置し空間を拡大させている工夫がみられた(写真10)。



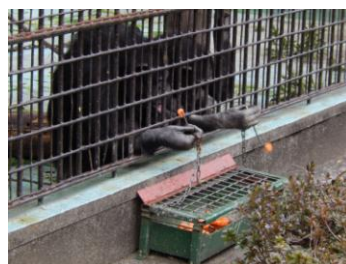
(写真10)

それによって各々のチンパンジーは、状況に応じてそれぞれ個体間距離を保つことができると考えられた。また、採食環境におけるエンリッチメントにも郡氏の尽力を感じた(写真11・12・13)。エンリッチメントに用いられている素材や材料には廃材などを用いており、製作費は安価で抑えられているとのことだった。野菜類を細かく刻んだりヨーグルトを設置するといったわず

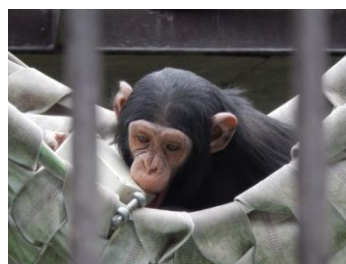
かな工夫によって、チンパンジーの採食時間を延長できているとのことだった。



(写真11)



(写真12)



(写真13)

エンリッチメントにおいては、単に時間をかけて採食させるだけではなく、動物自身がどのようにすればうまく採食できるかといった認知能力を駆使することが重要であり、その点においても考慮されたものだった。他にも天井格子の日除けなどさまざまな工夫があった。エンリッチメントを持続的におこなうためには、コストとのバランスを図ることが重要だと再認識できた。

c.) 都井岬および都井岬ビジターセンター

あいにくの悪天候に見舞われ、御崎馬が群れている様子を観察することはできなかったが、降りしきる雨のなか、ハナレオスを1頭だけ発見し数分間のみ追跡観察できた(写真14)。



(写真 14)

ビジターセンターでは館長の柳谷氏に、御崎馬が再野生馬として世界的にも希少であることや生息環境に適応してきた歴史などを、ユニークな展示を用いて解説いただいた (写真 15)。今後の研究フィールドとしての発展をぜひとも期待したいと感じた。



(写真 15)

6. 謝辞

本出張は、JSPS リーディング大学院プロジェクトより経費の支援を受けておこなわれた。松沢哲郎教授、友永雅己准教授には出張を承認いただき感謝いたします。また、急な訪問の依頼にもかかわらず現地に対応してくださった、幸島観察所の鈴木崇文氏・高橋明子氏、フェニックス自然動物園の出口園長・郡健一郎氏、都井岬ビジターセンターの柳谷聖一氏には厚く御礼申し上げます。さらに本出張に際し、中村克樹センター長をはじめとする人類進化モデル研究センターのみなさまには業務の調整や事務手続き等につきまして大変お世話になりました。感謝いたします。